

[492] “柿油党的顶子” —— 革命を許さず (二) 『阿 Q 正伝』を読む (15)

(57) “不应该只是这样的”

“他用一支竹筷将辫子盘在头顶上，迟疑多时，这才放胆的走去。”阿 Q は一本の竹の箸を使って辮髪を頭の上に巻き上げ、かなりためらった末、思い切って外へ出てみた。

通りを歩いていると、人は自分の方を見るが、何も話しかけてはくれない。阿 Q は初めは面白くなかったが、そのうちだんだん腹が立ってきた。

このところ、阿 Q は怒りっぽくなっていた。実を言うと、彼の暮らしは造反前より悪いわけではない。人々は彼に遠慮がちであったし、店屋も現金払いを求めなかった。

にもかかわらず、阿 Q は自分にはなはだ不遇であると思っていた。“既然革了命，不应该只是这样的。”革命をやったからには、こんなふうであってはならない。

(58) “气破肚皮”

そんな時、小 D に出会ったので、阿 Q は腸^{はらわた}が煮え返らばかりであった。小 D は阿 Q と同じ日雇い仲間。先に阿 Q が呉媽^{ウーマー}と騒ぎを起こして仕事を失った際に皆がこの小 D に仕事を頼んだというのでつかみ合いの大げんかをした、あの小 D である。

その小 D も辮髪を頭の上に巻き上げていた。しかも自分と同じように竹の箸を使って。“气破肚皮”，腸が煮え返るのも無理もない。

阿 Q 万料不到他也敢这样做，自己也决不准他这样做！小 D 是什么东西呢？（阿 Q はこの男までがこんなまねをするとは思ってもみなかった。奴^{やつ}がこんなまねをするのは断じて許すわけにはいかない。小 D の野郎、何様のつもりだい？）

(59) “吐一口唾沫道‘呸！’”

だが、阿 Q は結局は小 D を見逃すことにして、睨^{にら}みつけてペツと唾^{つば}を吐くだけにした。

この数日の間、城内へ行ったのはニセ毛唐だけであった。趙秀才も衣裳箱を預ったのをたよりに、自分で出かけて举人旦那を訪問するつもりであったが、辮髪を切られるのが怖くて、出かけるのをやめた。その代わりに格式ばった手紙を書いて相手を持ち上げ、城内へ行くニセ毛唐に託して届けてもらい、併せて自由党へ入党したいのでよろしく頼んだのだった。

假洋鬼子回来时，向秀才讨还了四块洋钱，秀才便有一块银桃子挂在襟上了。（ニセ毛唐は戻ってくると、銀貨四枚を秀才に請求し、秀才は銀の桃を襟につけるようになった。）

(60) “未庄人都惊服”

未庄人都惊服，说这是柿油党的顶子，抵得一个翰林；赵太爷因此也骤然大阔，远过于他儿子初隼秀才的时候，所以目空一切，见了阿 Q，也就很有些不放在眼里了。（未庄の人々は驚嘆して、あれは柿油党のしるしで、翰林に当たるんだぞとうわさした。趙太爺はこのため急に威張りだし、その威張りようは息子が初めて秀才になった時以上で、眼中人無しといった有様。阿 Q に会っても、目もくれなかった。）

“柿油党”は“自由党”などというハイカラなことばを知らない村人たちが、自分たちに身近な、音の近いことばを当てたもの。“柿油”は柿渋。“顶子”は官吏の位階を表す徽章・バッジの類。“翰林”は科挙の成績優秀者に与える称号。

2017/3/10